

ブラジルでの子育て③

～長男前編～



幼稚園で遊びながらポルトガル語を

覚えた妹や弟とは違い、長男は努力してポルトガル語を習得しました。

小学二年生になつたばかりの長男は、初日からブラジル人の子供が受けている通常の授業に投入され、算数も理科も歴史も地理もポルトガル語で習いはじめました。

しかも先生の板書は筆記体。私か

ら見てもとても読みにくいものです。「途中で消されちゃって写しきれなかつた」という長男のノートは、黒板の文字をまるで絵を写すように書き取ってきたもの。ブラジルに渡る前にせめてアルファベットだけでも教えてあげていれば…と、申し訳なくもなりました。

そこから長男と私の二人三脚の勉強が始まりました。家では挨拶や數の数え方、色や物の名前など、単語を覚えるところからスタートです。「これ昨日もおどといも教えてよね」と焦りも疲れもあって私はイライ

ラしてばかりでした。

学校からは毎日のよう大量の宿題が出されました。ポルトガル語超初級の長男が、ブラジル人と同じ内容の宿題を同じ量こなすのは無理な話で、私が横で辞書を引きながら手伝つても夜中までかかり、それで終わらないこともしばしば。

途方にくれてある時、教頭先生に直訴することに。「今は本人の語学力とかけ離れた学校の宿題をやるよりも、ポルトガル語の基礎から学ぶこと時間を見たい」と話しました。

教頭先生からの返答は厳しいもので、「宿題をやらなかつたり、テストで全科目及第点をとらなければ留学生になる。日本人だからといって特別扱いは一切しない」と。

学校には私達より先にアルゼンチンやフランスからの子供も入つていましたから、先生達は日本人も同じようなものだと思つたのでしょう。「私たちが急げているとでも思つてい

て、先生はそれを配る時に子供たちに修正するよう伝えたと言います。

しかし長男はそれを聞き取れていませんでした。

ただでさえ毎日孤独な思いをしているのに、一人だけ親も見に来ず、制服のまま発表会に出た長男の姿を想像し、また、先生は日時の間違いを息子にどうしてもつと丁寧に説明してくれなかつたのかと腹も立ち…。

毎日毎日少しずつふくらんでいた私の中の風船はついにはじけました。涙がどうにも止まらず、人のいない学校の裏庭に行き、うすくまつて動けませんでした。三人の子供は私のもわりでおろおろとしていました。

その頃、学校から読書発表会があるというお知らせが配られました。長男の発表は日本に関する本だった。衣装に浴衣を準備しました。朗読の練習もたくさんしました。

その頃、学校から読書発表会があるというお知らせが配られました。長男の発表は日本に関する本だった。衣装に浴衣を準備しました。朗読の練習もたくさんしました。

発表会の前日、いつものように学校に子供たちを迎えていくと、先生や他の保護者から「なんで今日来なかつた?」と次々に声をかけられました。翌日だと思っていた発表会が今日もう終わつたというのです。どうやらプリントの日時が間違つてい

文・写真
小宮華寿子
出版社編集部員
経て、フリー
写真家。著書に『
の手しごと』(メイツ出版)がある。

イラスト・
デザイン
寺沼麻美
切り絵作家、時々
デザイナー。「ゆ
らゆらゆれる北欧風手作りモビール」(ネコ・パブリッシング)を監修。



学校からプリントの日時が間違つていった。翌日だと思っていた発表会が今日もう終わつたというのです。どうやらプリントの日時が間違つていった。発表会の前日、いつものように学校に子供たちを迎えていくと、先生や他の保護者から「なんで今日来なかつた?」と次々に声をかけられました。翌日だと思っていた発表会が今日もう終わつたというのです。どうやらプリントの日時が間違つてい